

五十年史



第47回国民体育大会

H 4.10.4～8 寒河江市



総合開会式(天童市)



開始式



成年2部優勝の表彰



少年女子 村山選手(右)



少年男子準優勝の表彰



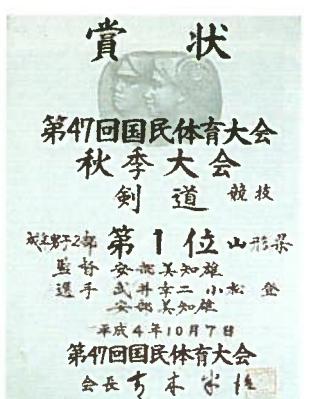
山形県選手団



総合成績 優勝



女子総合成績 優勝



成年男子2部 優勝



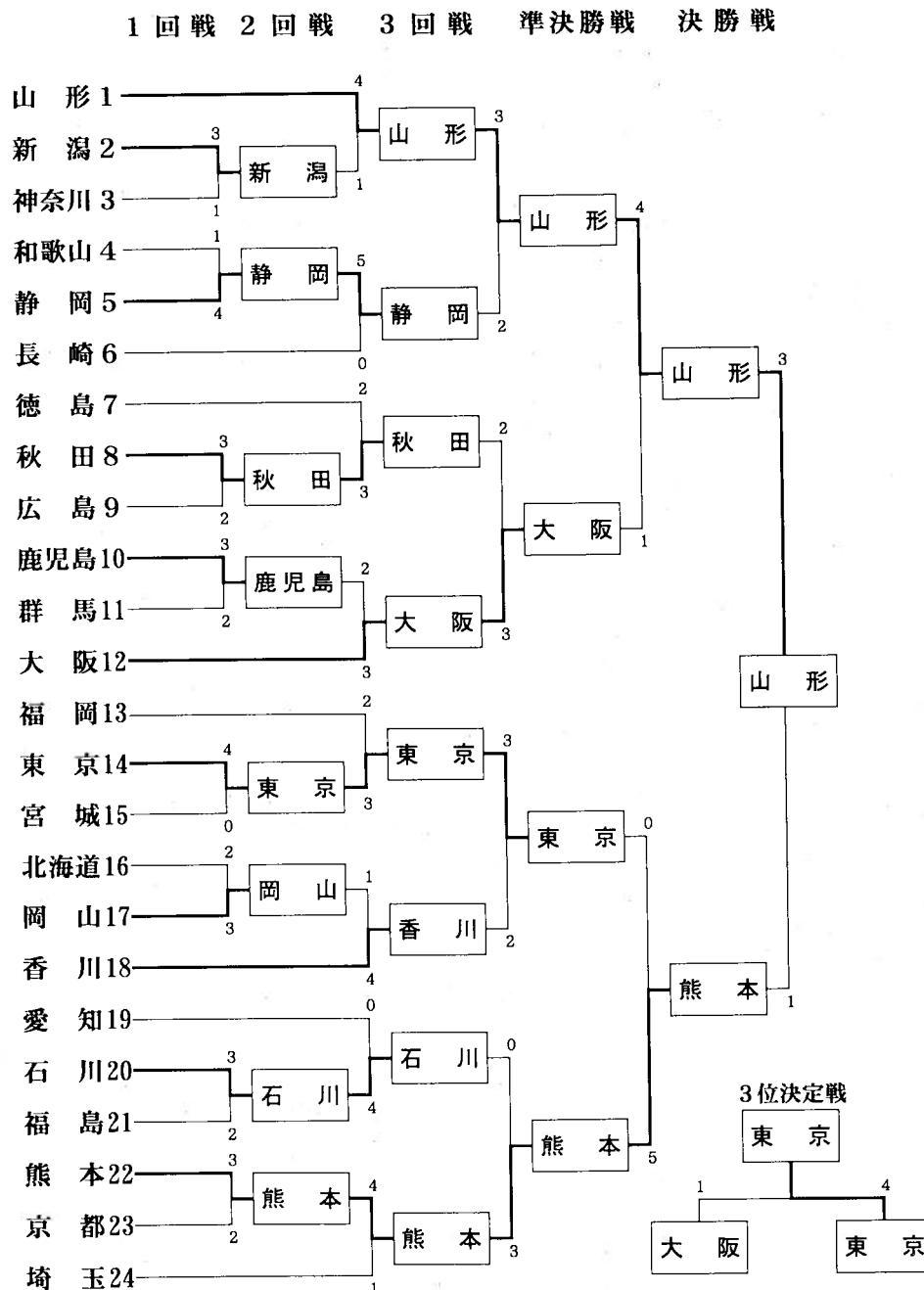
少年男子 準優勝



少年女子 優勝

剣道競技成績表

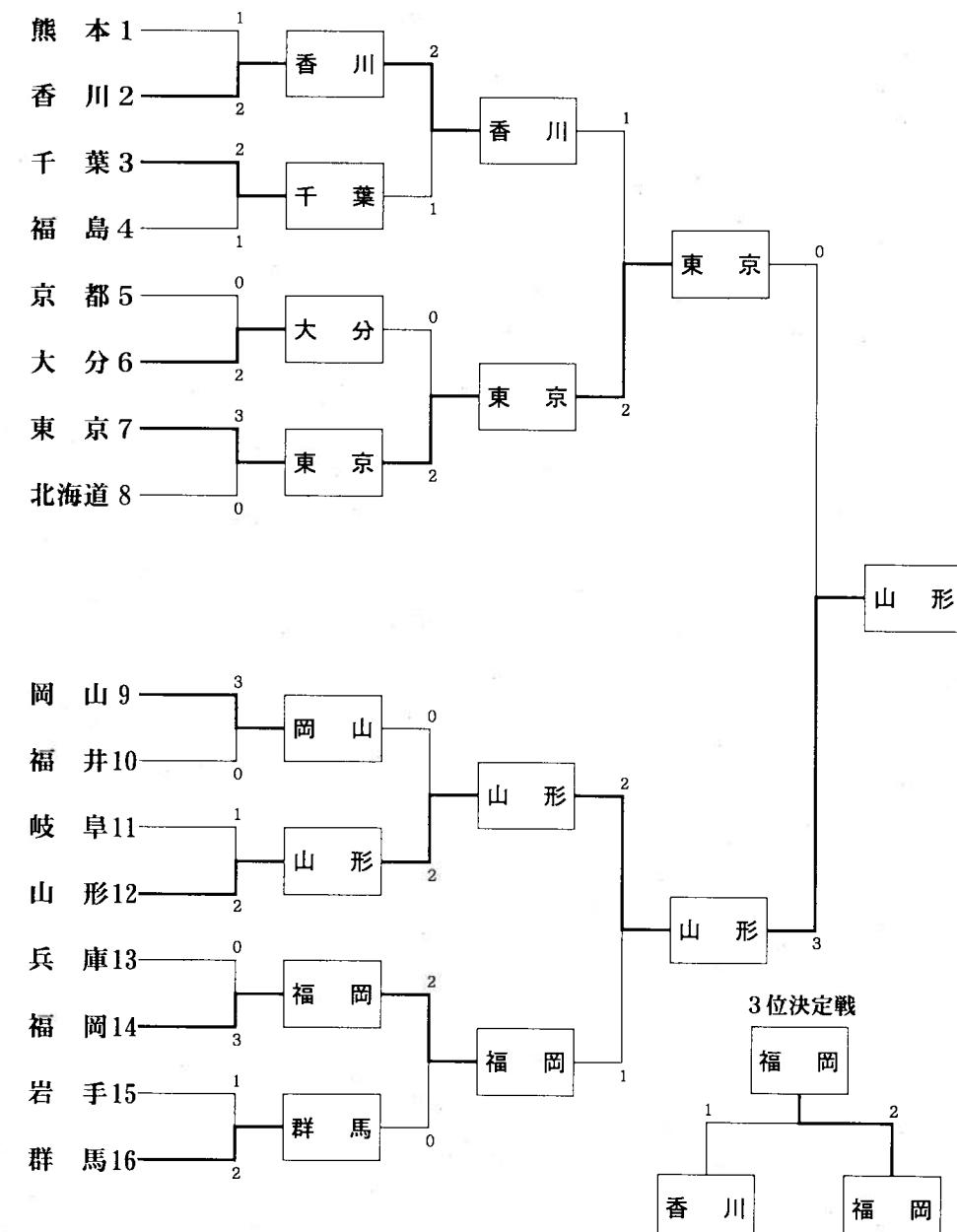
少年女子



剣道競技成績表

成年男子2部

1回戦 2回戦 準決勝戦 決勝戦





全国大会三冠を達成して (全国選抜大会・全国高校総体・国民体育大会)

左沢高等学校剣道部監督 斎 藤 学

★天時不如地利、地利不如人和

「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」『孟子 公孫丑章句下』の一節である。天の時がいかによくても地の利には及ばないし、地の利がいかによくても人の和には及ばない。つまり人も和が乱れていては天の時も地の利も戦いにおいては何の役にも立たないと言うことであると思われる。

全国選抜大会、全国高校総体、べにばな国体での接戦を戦い抜いた事実は、まさしくこのことを実践に移したと言っても過言ではない。その結果、石川国体を皮切りに三冠を含めて連続日本一を勝ち取ることができたのだと思う。

★トレーニングがプライドに

今の左沢高剣道部のパワーは、他校とは全然違います。相手はぶつかられただけで、打撲、肉ばなれを起こします。平成4年東北ミニ国体、対秋田県、先鋒戦での左足大腿部打撲により病院送り、べにばな国体、対熊本県、中堅戦での左足大腿部肉ばなれ、等々。相手はびっくりして試合になれませんでした。我校のトレーニングは、パワーアップの他にも、様々な意味で効力が現われています。一つはケガの予防です。そして、何よりもそれが部員のプライドにつながったということです。剣道界ではどこでもやっていないことを、自分たちはやっているという自信。毎日毎日の稽古はもちろん必要だし重要だけれど、それだけでは決して自信にはつながりません。だから今でも練習全体の4~5割を筋力トレーニングに当

てています。

★寮生活の必要性

現在、女子部員は全員寮生活を送っています。日本一になるためには寮生活は必須条件だというのが、私の持論です。一つの目標に向かって寝食を共にするということは、非常に重要なことです。寮生活の中では自分のペースで生活できないし、ある意味ではすべてを犠牲にすることになります。しかし、チームが勝つという一つの目標の前では、個人のわがままは決して許されるものではないと思うのです。選手がそれを学ぶ場が寮生活だと思います。寮の規則は極めて厳しいものです。例えば、私服は着せない、ジャージだけ。

門限8時、電話は10時半まで、10時半消燈です。中学まで親元で生活してきた生徒達にとっては、非常に厳しい環境です。

★日本一への執念

私は、自分の性格を分析した時、しつこいくらい粘着質だと思います。一度食らいついたら絶対に放さない。つまり、目標達成のためならとことんやる。どうせやるからには、頂点に立ちたい。半端じゃ投げ出さない。それが、上杉鷹山の教えである「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」を実践することだと思うからです。そして私は高校時代インターハイに行けなかったという悔しい経験があります。あの時のような気持を自分の生徒には味わわせたくないという気持を強く持っています。同時に、私自身が完全に日本一の魅力に取りつかれているんだと思います。1位がある限り、2位では諦めたくないし、常に最初に学校名を呼ばれたいと思っています。だから私は、負けることは非常に悔しいし、負けた大会でも必ず閉会式まで残ります。試合で負ければ悔しくて会場から一刻も早く立ち去りたいと思うけれどもそれは逃げることであり、来年の勝ちには決して結びつかないからです。閉会式を見ながら「来年は必ずあそこに整列するぞ。そのために今はうんと悔しがれ」と言っています。日本一の執念は、監督自らが持ち続けなければならないと、今後も自分自身肝に銘じてまいります。



(山形新聞 平成4年10月7日)



表彰式の様子。左は吉澤監督、右は藤井選手

(山形新聞 平成4年10月7日)

左沢高校の主な戦績

- | | |
|------------------|---------------------|
| ・昭和58年度全国高校総体 | 女子団体 第2位 |
| ・昭和62年度全国高校総体 | 女子団体 第2位 |
| ・昭和63年度全国高校総体 | 女子団体 第3位 |
| ・第44回(平元)国民体育大会 | 少年女子 優勝 |
| ・第46回(平3)国民体育大会 | 少年女子 優勝 |
| ・平成3年度全国高校総体 | 女子個人 第3位
(後藤友見子) |
| ・第1回(平4)全国選抜大会 | 女子団体 優勝 |
| ・平成4年度全国高校総体 | 女子団体 優勝 |
| ・第47回(平4)国民体育大会 | 女子団体 優勝 |
| ・平成7年度全国高校総体 | 女子個人 優勝
(鎌田 暖代) |
| ・平成10年度全国高校総体 | 女子団体 優勝 |
| ・平成10年度全国高校総体 | 女子個人 第3位
(鈴木 優子) |
| ・第8回(平11)全国選抜大会 | 女子団体 第3位 |
| ・第9回(平12)全国選抜大会 | 女子団体 第3位 |
| ・第10回(平13)全国選抜大会 | 女子団体 優勝 |
| ・平成13年度全国高校総体 | 女子団体 第2位 |
| ・山形県高校総体女子団体 | 20連覇(昭和58年~) |



べにはな国体に優勝して

少年女子選手 村 山 千 夏

親元を離れてのなれない共同生活に戸惑いながら、今までこんなに練習したことがないというほど厳しく、辛い練習、すべてが初めてであり、新しいことだらけでした。

この日本一厳しく、辛い練習に耐えることが出来たのは、やはり同級生の存在でした。

みんな同じ目標を持ったライバルであるのももちろんのことですが、時には意見が合わず、お互のことを理解し合えるまでとことん喧嘩をしたけれど、いざという時に頼りになるのは同級生でした。そのおかげで私は、3年間を過ごすことができたのだと思います。

高校生活で忘ることのできない大会は、やはり3年生の時にどこの学校もやりとげたことのない、選抜、インターハイ、国体、三冠達成です。

私達が3年生になる春から選抜大会が始まり、第1回大会、左沢高校では先輩達が国体少年女子第1回大会優勝していることもあり、私達も「1回大会を優勝しよう」と誓い、大会に臨み順調に勝ち進み、決勝は熊本の阿蘇高校、遠征、大会で何度も試合をしたチームとの対戦でした。

今までやってきたことを自信に相手に思つ切りぶつけることができ、優勝することが出来ました。

しかし、3年の新学期が始まつて追われる立場になり、喜んでばかりはいられませんでした。

選抜に勝てたからといってインターハイで勝てるとは限らない。1人ひとりが新たな気持ちで次の目標に向かって頑張ろうと気を引き締めてインターハイに臨みました。

インターハイは、選抜で勝つよりも大変でした。

準決勝、熊本の阿蘇高校、相手は選抜の時とオーダーが違い、接戦の末勝ち、決勝も気を抜くことなく試合ができ優勝できた時は、今まで1番うれしく、斎藤学先生の涙を今でも忘れる事ができません。

そして迎えた地元開催でのべにはな国体、準決勝で静岡県との対戦では、自分があまりにも簡単に負け、大将戦になり、後藤が勝たなければ自分にとって最も悔いが残る試合になってしまったところでした。

決勝戦、反対ブロックから勝ち上がったのはやはり、熊本県チームでした。

「私達は、高校生活最後の試合なのだから、今までやってきたことに自信を持ち頑張ろう」と声を掛け合つて試合に臨みました。

決勝戦では、今でも忘れません。試合で初めて突いて面を打つて決まった時は自分でもびっくりし、うれしかったことを覚えています。

地元開催ということで今までにない大きな応援に支えられて、のびのびと楽しく試合ができ、高校生活の最後の大会を優勝、そして三冠達成という良い結果で終わることができとても幸せでした。

これからも左沢高校剣道部で学んだことを生かして頑張っていこうと思います。

